

「海図」「水路誌」と竹島問題

“Sea Charts,” “Waterway Journals,” and the Takeshima Issue

名古屋大学大学院文学研究科
Graduate School of Letters, Nagoya University

池 内 敏
IKEUCHI, Satoshi

Abstract

In the history of Takeshima debate, a controversy continues about whether awareness of territory and territorial waters can be incorporated into records of *kaizu* (sea charts) and *suiroshi* (waterway journals). This paper involves systematic collection of *kaizu* and *suiroshi* from around 1905 when Takeshima was annexed as part of Japanese territory. In addition, the paper offers a conclusion to the controversy regarding *kaizu* by referring to the *kaizu* regulations that determined how place names should be recorded. Consequently, it argues that territorial awareness can be clearly seen in *kaizu* and *suiroshi*, and that, judging from these records, the Japanese Navy prior to 1905 considered present-day Takeshima to lie outside Japanese territory.

Keywords

kaizu / sea charts (海図), *suiroshi* / waterway journals (水路誌), territory (領土),
territorial waters (領海), Takeshima (竹島)

はじめに

竹島領有の正当性をめぐる日韓両政府間の見解往復は、1953年から65年までに四往復なされた。そのうち「水路誌」を論拠にした主張は、すでに第一回目の韓国政府見解（1953年9月9日）の第七項目において、「日本が韓国を強制的に併合していた間ですら、独島が鬱陵島の附属島と見なされて」いたことは「1933年日本海軍省の編纂になる朝鮮沿海水域調査第三卷「朝鮮海岸」¹⁾」によっても証明される、という仕方なされている。この主張を日本側は『朝鮮沿岸水路誌』では、竹島を鬱陵島の附属島と見なしている。」と理解し（日本政府見解第二回、1954年2月10日）、同見解のなかで「本来、水路誌は使用者の便宜のために編さんされているものであり、島の帰属とは関係はない。」と述べ、竹島が『朝鮮沿岸水路誌』に掲載されていることは認めつつも、同時に『本州沿岸水路誌』にも掲載されている点を指摘して「水路部が竹島を鬱陵島の附属島として扱っているものではないことが明らかである。」と反論した²⁾。

この見解往復からは、(A)「水路誌」の性格・編纂目的はいかなるものか、(B)竹島は鬱陵島の附属島か否か、という二つの論点を読み取れるが、日本政府見解に大きな影響を与えた川上健三は、その著作『竹島の歴史地理学的研究』のなかで如上の観点から「水路誌」に言及することはない³⁾。むしろ水路誌への言及として注目されるのは堀和生の仕事である。堀は前掲の論点(A)に関連して「海図は地理的な認識を示すだけなので、海図中の島の所属については、その解説書たる水路誌を重視しなければならない。」[堀和生・105頁]と述べ、『寰瀛水路誌』に始まる日本近代の水路誌を検討して以下のように論じた。

【引用1】

…日本領海を他と区別して『日本水路誌』として独立させ、九二年から順次刊行していった。この水路誌には、九五年の下関条約による日本の新領土台湾や澎湖島、さらには千島列島最北端の占守島まで載せられているが、反面台湾の対岸やカムチャツカ半島は全然含まれていない。すなわち、この『日本水路誌』の扱う範囲は、あくまで日本の領土・領海に限定されていたのである[堀和生・105頁]。

ここに見るように、(A)に関わる堀見解は日本政府見解におけるものとはほぼ対極の位置にあり、「水路誌」によって島の所属が明らかにできると見なしている。ただしそれは厳密に言えば、島の所属が確定できるというよりは、島の所属についての認識が明らかにできる、というものであった。堀は堀なりの「水路誌」理解を踏まえて、1897年版『日本水路誌』にリャンクール島（列岩。現在の竹島のこと）が無く、1894年版・97年版『朝鮮水路誌』にリャンクール列岩が掲載されていることをもって、「一九世紀末に、日本海軍の水路部当局が竹島＝独島を朝鮮領と認識していたことは、疑いのないところである。」[堀和生・106頁]と論じたのである。

さて、「海図」および「水路誌」をどのようなものとして見るかについては、概ね以下の発言を引用すれば足りるであろう。㊦「本来、水路誌は使用者の便宜のために編さんされているものであり、島の帰属とは関係はない。」（1954年日本政府見解、前掲）、㊩「海図や水路誌の作成目的は、航行の安全確保のためであった。…水路部は島嶼、岩礁など海図作製のための調査機関であり、「国境画定機関」でない」[松杉力修・155頁]、「一般に、水路誌や海図は航行の便宜のためのものであって、表題に用いられた地域名の政治的法的な範囲を示すためのものではない」[塚本孝・58頁]、㊪「海図は地理的な認識を示すだけなので、海図中の島の所属については、その解説書たる水路誌を重視しなければならない。」[堀和生・105頁]である。

右の三つのうち㊦は見かけ上「水路誌」のみの言及だが、おそらくは「海図」も「水路誌」と同様と見ているだろう。したがって結局のところ、㊩「海図」「水路誌」はいずれも領土・領海を示すものではない(㊦㊩)、㊪「水路誌」からは領土・領海意識を読み取ることができる(㊪)、の二つの見解対立に整理できよう。これまでのところ、「海図」から領土・領海意識を読み取りうるとする主張は見当たらないようである。

本稿は、堀見解ののちに現れたいくつかの論考に触れながら「海図」および「水路誌」を概観し、もって「海図」「水路誌」から領土・領海意識を読み取りうるか否かについて検討するものである⁴⁾。

一 「海図」に見える竹島

まず、「海図」について検討する。「海図」は、たとえば次の【引用 2】にあるように定義される。また「日本海軍海図式」(明治36年)総記部分には、海図作成にあたっての留意点が14ヶ条にわたって列挙される⁵⁾【引用 3】。

【引用 2】

海図ハ経緯度ヲ画シタル紙面ニ尺度ヲ定メテ陸岸、山嶽、河流、島嶼、港湾、沿岸都市町村、ヲ顯シ之レニ海底ノ深淺、土質、暗礁、激流ノ位置ヨリ、灯台、灯船、立標、浮標ニ至ルマテ其所在ヲ明記シ又船舶ノ航路、羅針盤及ヒ港口水路ノ見取図ヲ載セタルモノナリ故ニ海図ナケレハ船隻ノ所在ヲ知り從テ其向フ所ノ針路ヲ定ムルコト能ハス… (以下略) … [木村浩吉・3頁]

【引用 3】

○凡ソ海図ノ構成ハ真子午線ノ北ヲ真上トシ東西両辺ノ画線ヲ之ニ平行セシムルヲ例トス然レトモ時トシテ該子午線ヲ斜メニシテ構成スルコトアリ
○朔望高潮、基本水準(割注)「即大低潮平均水面」及大高潮、小高潮、小低潮ノ各平均水面ハ潮候測定心得ノ算法ニ依テ之ヲ定ム

(以下、12ヶ条省略)
〔「日本海軍海図式」明治36年〕

これらからすれば、「海図」の作成目的が領土・領海の確定にあったわけではないことは確かであり、その限りでは先の④にあるように「(海図は、その)表題に用いられた地域名の政治的法的な範囲を示すためのものではない」という指摘は妥当である。しかしながら、次の事例はどうだろうか。

「朝鮮全岸(英文表題はKOREA)」なる表題をもつ海図で刊行年次の異なるものが三点ある。刊行順に①②③としておこう⁶⁾。①は明治15年(1882)の刊行で、収録された東西の範囲は、東経124度～130度。ここに鬱陵島は描かれるが、リアンコールト岩は描かれない。②は明治29年(1896)の刊行で、収録された東西の範囲は、東経124度～132度25分。鬱陵島とリアンコールト岩がともに描かれる。③は明治39年(1906)4月2日の刊行で、収録された東西の範囲は、東経122度～131度05分。ここに鬱陵島は描かれるが、

リアンコールト岩は描かれない。竹島の日本領編入時点(1905年1月)との関わりでいうと、①②は編入前で、③は編入後間もない時期にあたる。また、収録範囲に着目すると、②は①と比べると西側は同一だが東側に収録範囲が拡大しており、③は②に比して全体に西寄りに範囲を変更していることが分かる。

さて、③が刊行されたのとほぼ同時期に「日本中部及朝鮮(英文表題はMAIN PART OF JAPAN AND KOREA)」なる表題をもつ海図が刊行されている(明治39年3月12日)。東西の収録範囲は東経127度15分～136度15分であり、鬱陵島と竹島がともに描かれる。竹島日本領編入後なのでリアンコールト岩ではなく竹島と表記される。この図を④としておこう⁷⁾。③と④とは相互に隣接する領域を描いた海図であり、③の東方と④の西方が重複して描かれる。繰り返しになるが、その隣接する重複領域を描くに際して③には鬱陵島のみが描かれて、④には鬱陵島と竹島が描かれる。

これら①②③および③④それぞれの比較検討に従えば、これら海図が描かれるに際して領土・領海が意識されているようにも思われる。海図の作成目的は領土・領海を確定するところにはなかったものの、ある地域名称を付した表題をもつ海図を作成するに際し、その範囲をどのようにするかを判断するにあたって領土・領海が強く意識されている、ということである⁸⁾。

ところで、先に明治36年刊行の「日本海軍海図式」を引用するに際して省略した12ヶ条のなかに、以下のような条文がある。

【引用 4】

○地名ハ日清韓三国ノ領土領海ニ限り漢字ト羅馬字ヲ用ヒ場所ニヨリ之ニ英称ヲ附ス而シテ其他ノ地ハ概ネ英字名称ヲ仮用スルヲ例トス水路部出版図誌地名記法参照(下線は引用者)

「海図式」は海図作成にあたっての約束事を記したものである。日本では明治15年(1882)に最初の独自の「海図式」が作成されたが海軍部内限りで使用され、公開されなかった。また現存しない。同26年(1893)に最初の改訂が施され、これが現存する最古の「海図式」である。第二回めの改訂が同36年(1903)であり、【引用 4】はこの

ときのものである。

ところで、明治26年の「海図式」総記部分で海図中の地名表記法を示すに際しては【引用4】とは異なり、「地名ハ和字ヲ用ユルヲ例トス、然レトモ時トシテ羅馬字ヲ附記シ又諸記事ハ和英両文ヲ対掲スルコトアリ」とする⁹⁾。明治36年の「海図式」改訂において、「海図」に記入すべき地名の表記法と密接に関わって「領土領海」なる用語が使用されていることに気づくのである。そうである以上は、少なくとも19世紀末20世紀初頭の時期における海図作成に際して領土・領海が意識されていたことは明瞭である。

以上を踏まえると、⑥から⑨への変化には注意が必要となる。1896年にはリアンコールト岩を「朝鮮全岸」に含めていた海軍水路部は、竹島日本編入後の1906年にはそれを「朝鮮全岸」から除外しているからである。そして先の「海図式」の記載変化はこの間に生じている。

二 「水路誌」にみえる竹島

(1) 宋彙榮「近代日本の水路誌に現れた鬱陵島・独島認識」について

表題に掲げた宋彙榮論文は、1883年から1952年に至る日本で刊行された日本水路誌・朝鮮水路誌等に見える鬱陵島と竹島を網羅的に概観するものである。宋彙榮は「独島が果たして無主地であったかどうかは…水路誌を通して表された日本の鬱陵島・独島認識を検討すれば明らかになる」と述べる(242頁)。竹島の「無主地先占」論批判のために、従来は個別的に扱われてきた水路誌を系統的に分析するという¹⁰⁾。

その内容を順に要約してみよう。

まず、1877年・80年の鬱陵島実測調査を踏まえて83年7月に刊行された「水路雑誌」16号・41号に鬱陵島のみが現れることを指摘し、続いて「寰瀛水路誌」(1883年刊行)第二巻第四編朝鮮東岸項に鬱陵島とリアンコールト列岩が記載されることを述べる。1886年刊行の「寰瀛水路誌」第二版でも同様に扱われるから、これは「独島を韓国沿岸部分に置くということだ」と評価する。そして、同じ「寰瀛水路誌」第二版の大日本沿岸北西部第一巻下には隠岐全島の記述があるのに、そこには竹島が含まれない点に注意を喚起して以下のように述べる。「独島をどこに含ませるかということ

は、日本海軍省がこれをどの国の領土と見なしていたかを教えてくれる。言うまでもなく、独島は朝鮮の領域であると認識していたと分かるのである。」(253頁)と。

やがて「寰瀛水路誌」の編纂は中断され、代わりに「日本水路誌」「朝鮮水路誌」「支那水路誌」など国家・領域単位で編成された水路誌へと衣替えした。そのうち「朝鮮水路誌」は1894年11月に刊行されたのち、99年2月に第二版、1907年に第二改版が刊行された。そして、1911年から「朝鮮水路誌」は無くなって「日本水路誌」に含まれることとなったが、これは1910年の韓国併合を契機としている。

右のうち1894年と99年の「朝鮮水路誌」いずれにも鬱陵島とリアンコールト列岩が記載される。そこから、「国家別、領土別に区分された『水路誌』でも独島は「リアンコールト列岩」として記録され、明確に朝鮮の領土として見なされていたことが分かる」(255頁)という。一方、1897年3月刊行の「日本水路誌」第四巻本州北西岸項には隠岐島までが含まれるに止まり、竹島の記載は無い。このことは、竹島が鬱陵島の附属島であると認識されていたことを示す、と宋彙榮は見る(256頁)。

ところで、「朝鮮水路誌」第二改版(1907年3月刊行)には鬱陵島と竹島が記載され、「日本水路誌」第四巻第一改版(1907年6月刊行)第三編本州北西岸項には竹島が記載される。それまでリアンコールト列岩と表記されていたものが竹島と記されるのは、1905年1月における竹島日本領編入と関連している。竹島が日本領に編入された以上、それが「日本水路誌」の方に包含されるのは、それまでの宋彙榮の論旨に照らせば妥当なところである。しかし、日本領に編入された竹島が「朝鮮水路誌」にも記載され続けていることは、どのように説明するのか。宋彙榮はこうした記載は「(独島が)依然として朝鮮の領域として見なされていた」(257頁、259頁)ことを示すものと述べるものの、そのような表記となった理由については明確でないとする(260頁)。そして「独島は鬱陵島とセットだ」という意識が強かった」から分離記載ができなかった(259頁)、あるいは「実務者レベルでは独島の削除確認が及ばなかった」(260頁)からではないかと推測する。

その後、「日本水路誌」第六巻(1911年)第二

編朝鮮東岸項には鬱陵島と竹島が記載され、「同」第四卷(16年)第一編本州北西岸項に竹島が、「同」第一〇卷上(20年)には鬱陵島と竹島が記載されるという。この1920年4月刊行の「日本水路誌」第一〇卷のうち朝鮮沿岸部分がやがて独立し、1933年1月に「朝鮮沿岸水路誌」第一巻となるが、ここには鬱陵島と竹島が記載される。

以上を踏まえて、宋彙榮は「水路誌では鬱陵島と独島をひとつのセットと見なしていた」「水路誌は領海・領土を単位として区分したことは明らかであり、したがって独島・鬱陵島を『朝鮮水路誌』に含めていたことは、これらが朝鮮の領域にあると見なしていたのは明白である」(268頁)とする。先述の(A)(B)ふたつの論点がここでも確認できる。

(2) 「水路誌」の記述と評価

さて、「水路誌」である。まずは、「水路誌」における竹島関連記述を年代順に列記しておこう。

【引用5】明治25年(1892)3月新刊「日本水路誌 第一巻」

*この巻自体は「日本沿海総記、東京海湾、本洲東岸、南方諸島」を対象とするが、なかに色刷りの「海岸区域図」が挿入されており(挿図1)、朝鮮、松島(鬱陵島)、リヤンコルド岩も当該図中に含まれる。その際に、日本水路誌に含まれる「海岸区域」には区域ごとに色分けされた彩色が施されるのに対し、朝鮮、松島(鬱陵島)、リヤンコルド岩には彩色が施されない。また、中国大陆にも彩色が施されず、台湾は図中に含まれない。

(福井大学附属図書館)

【引用6】明治27年(1894)11月刊行「朝鮮水路誌 全 自鴨緑江至豆満江」

〈奥付〉明治二十八年十二月十三日印刷／明治二十八年十二月十六日発行再版／発行者 水路部
第四編朝鮮東岸

リアンコールド列岩

此列岩ハ洋紀一八四九年仏国船「リアンコールド」号初テ之ヲ発見シ船名ヲ取テリアンコールドト名ツク、其後一八五四年露国「フレガット」形艦「パラス」号ハ此列岩ヲメナライ及ヨリヴツァ列岩ト称シ、一八五五年英艦「ホルネット」号ハ

此列岩ヲ探検シテホルネット列岩ト名ツケリ、該艦長フォルシイスノ言ニ拠レバ、此列岩ハ北緯三七度一四分、東經一三一度五五分ノ処ニ位スルニ坐ノ不毛岩嶼ニシテ、鳥糞常ニ嶼上ニ堆積シ嶼色為ニ白シ、而シテ北西イ西至南東イ東ノ長サ凡一里、二嶼ノ間距離一ノ四里ニシテ、見タル所一礁脈アリテ之ヲ連結ス、○西嶼ハ海面上高サ凡四一〇呎ニシテ、形チ糖塔ノ如シ、東嶼ハ較ニ低クシテ平頂ナリ、○此列岩付近水頗ル深キカ如シト雖モ、其位置ハ実ニ函館ニ向テ日本海ヲ航行スル船舶ノ直水道ニ当レルヲ以テ頗ル危険ナリトス

*原文読点なし。読点は引用者による。二重傍線および傍線は原文のまま。

(筑波大学附属図書館)

【引用7】明治30年(1897)3月刊行「日本水路誌 第四巻」

*竹島の記載なし。

*日本水路誌第四巻関係海図索引あり。その図に竹島の記載なし。
(神戸大学人間科学部図書室)

【引用8】明治32年(1899)2月刊行「朝鮮水路誌 第二版」

第四編朝鮮東岸

リアンコールド列岩

此列岩ハ洋紀一八四九年仏国船「リアンコールド」初テ之ヲ発見シ称呼ヲ其船名ニ取ル、其後一八五四年露国「フレガット」形艦「パラス」ハ此列岩ヲメナライ及ヨリヴツァ列岩ト名ツケ、一八五五年英艦「ホルネット」ハ此列岩ヲ探検シテホルネット列岩ト名ツケリ、該艦長フォルシイスノ言ニ拠レバ、此列岩ハ北緯三七度一四分、東經一三一度五五分ノ処ニ位スルニ坐ノ不毛岩嶼ニシテ、鳥糞常ニ嶼上ニ堆積シ嶼色為ニ白シ、而シテ北西イ西至南東イ東ノ長サ凡一里、二嶼ノ間距離約二鏈半ニシテ、見タル所一礁脈アリテ之ヲ連結ス、○西嶼ハ海面上高サ凡四一〇呎ニシテ、形チ糖塔ノ如シ、東嶼ハ較ニ低クシテ平頂ナリ、○此列岩付近水頗ル深キカ如シト雖モ、其位置ハ実ニ函館ニ向テ日本海ヲ航行する船舶ノ直水道ニ当レルヲ以テ頗ル危険ナリトス

*原文読点なし。読点は引用者による。二重傍線および傍線は原文のまま。

(大阪市立大学附属図書館)

【引用9】明治37年（1904）12月第一改版「日本水路誌 第一巻」

*この巻自体は「日本沿海総記、東京海湾、本洲東岸及南方諸島」を対象とするが、なかに色刷りの「海岸区域図」が挿入されており（挿図2）、朝鮮半島、鬱陵島、Liancourt Rksも当該図中に含まれる。その際に、日本水路誌に含まれる「海岸区域」には区域ごとに色分けされた彩色が施されるのに対し、朝鮮半島、鬱陵島、Liancourt Rksには彩色が施されない。また、中国大陸には彩色が施されないのに対し、台湾には彩色が施されている。

（筑波大学附属図書館）

【引用10】明治40年（1907）3月刊行「朝鮮水路誌 第二改版」

第五編日本海及朝鮮東岸

竹島〔Liancourt rocks〕

一八四九年仏船「リアンコール」之ヲ発見セシヲ以テLiancourt rocksト称ス、其後一八五四年露艦「パルラス」ハ之ヲMenalai and Olivutsa rocksト名ツケ、一八五五年英艦「ホルネット」ハ之ヲHornet islandsト呼ベリ、韓人ハ之ヲ独島ト書シ本邦漁夫ハリアンコ島ト曰フ、

此島ハ日本海上ノ一小群嶼ニシテ隠岐国島前ヨリ大約八十哩、鬱陵島ヨリ大約五十哩ニ位シ広四分一哩ノ狭水道ヲ隔テ、東西ニ相対スル二島ト其周囲ニ碁布スル幾多ノ小嶼トヨリ成ル、西島ハ海面上高約四一〇呎ニシテ棒糖形ヲ成シ、東島ハ較ヤ低ク頂上ニ平坦ナル地アリ、周囲ノ諸小嶼ハ概ネ扁平ノ岩ニシテ僅ニ水面ニ露出シ、其大ナルハ優ニ数十畳ヲ數クニ足ルヘシ、二島共ニ全部瘠瘦ノ禿岩ニシテ海洋ノ蛮風ニ曝露シー株ノ樹木ナク東島僅ニ野草ヲ生スルノミ、島岸ハ断崖絶壁ニシテ軟性ノ石層ヨリ成リ、奇観ノ洞窟多ク殆ト攀躋スヘカラス、此等ノ洞窟及ヒ小嶼ハ「トド」ノ群棲所タリ、

此島ハ其付近水深ク軍艦対馬ハ東島ノ南端ヲ距ル北西方約九鏈ノ処ニ於五十八尋ヲ測得セリト云フ、然レトモ此島ハ其位置日本海ヲ航上スル船舶ノ航路ニ近キヲ以テ夜間ハ危険ナリトス、島上ノ平地

島上平地ニ乏シク水道ノ両側ニ狭小ナル平坦ノ礫地二三箇所アルモ皆海濤ノ侵襲ヲ免レス、東島ハ其頂ニ平坦ナル地アレトモ、之レニ登ルノ経路ナ

ク、唯島ノ南端ニ於テ北西風ヲ遮蔽スル三、四坪ノ小地アルノミ、西島ハ其東西ニ山崩アリテ其上半殆ト直立スレトモ下半ハ傾斜稍ヤ緩ナルヲ以テ其半ハマテ達スルヲ得ヘク、此辺ノ堅岩ヲ開鑿セハ東島ヲ除ク外諸風ヲ遮蔽スヘキ平地ヲ得ヘキナランカ、島上ニハ上記ノ如ク家屋ヲ建築スヘキ地極テ乏シク明治三十七年十一月軍艦対馬ノ此島ヲ実査セシ際ハ東島ニ漁夫用ノ菰葺小屋アリシモ風浪ノ為メ甚タシク破壊シアリト云フ

毎年夏季ニ至レハ「トド」獵ノ為メ鬱陵島ヨリ渡来スル者数十名ノ多キニ及フコトアリ、此等ハ島上ニ小屋ヲ構ヘ毎回約十日間仮居スト云フ、淡水

西島ノ南西隅ニ一洞窟アリ、其天蓋ヲ成セル岩石ヨリ滴出スル水ハ其量稍ヤ多シト雖モ雨水ノ滴下ニ等シキヲ以テ採取ニ困難ナリ、此他数箇所ニ於テ山頂ヨリ山腹ニ添フテ滴瀝スル水及ヒ湧泉アレトモ、其経路ハ「トド」ノ尿ニ屢々汚染セラレテ一種ノ惡臭ヲ放チ到底飲料ニ適セス、「トド」獵ノ為メ渡来スル漁夫ハ島水ヲ採取シテ煮炊ノ用ニ供スレトモ茶水ハ他ヨリ持ち来タレルモノヲ用ユト云フ

位置（*）

竹島ハ一九〇二年ニ施セル米艦「ニウヨーク」ノ検測ニ拠レハ北緯三七度九分三〇秒、東經一三一度五五分ニ在リ

（*）（貼紙） なお、この貼付位置は『朝鮮水路誌』454頁冒頭部分に当たる。

「 〇第六三八六項

本洲北西岸 隠岐列島北西方

竹島〔Liancourt rocks〕ノ正位置

一記事 明治四十一年当部ノ測定ニ拠レハ隠岐列島ノ北西約八十哩ニアル竹島〔Liancourtrocks〕二嶼及数岩ヨリ成ル、ノ正位置ハ左ノ如シ

一位置 該二嶼中ノ東嶼（女島）

北緯三七度一四分一八秒

東經一三一度五二分二秒

一関係海図 第一六二号第二号

一関係誌類 日本水路誌第四卷三七二頁朝鮮水路誌四五四頁（告第二〇九四号）」

*二重傍線は原文のまま。

（静岡県立大学附属図書館）

【引用11】明治40年（1907）6月第一改版「日本水路誌 第四卷」九州北岸西岸南岸 本州北西岸及北岸

日本水路誌第四卷序

本卷ハ明治三十年三月刊行日本水路誌第四卷ノ第一改版ニシテ前版ノ第一編中ヨリ九州北岸全部、同西岸ノ内野母埼以北並ニ同二編中ヨリ五島列島及男女群島ヲ割テ第一編トシ、第二編ニハ九州西岸ノ殘部ト斷列島及九州南岸トヲ収録シ、第三編ニハ前版ト同シク本洲北西岸及同北岸ヲ記述シ、特ニ竹島ヲ編入セリ、而シテ其編纂修正ニ用ヒタル主要ノ資料ハ凡ソ左ノ如シ、
第一編中九州北岸小呂島ヨリ平戸瀬戸北口ニ至ル海岸及九州西岸の山大島ヨリ平戸島東岸川内湾迄ハ明治三十一年小黑海軍大尉同三十五年菅海軍少佐、対馬島泉浦ハ同三十年高野瀬海軍水路監、平戸瀬戸ヨリ松島水道迄ハ同三十三年江副海軍少佐ノ各記事、長崎港及付近ハ水路報道第八十四号、五島列島ハ殆ト英誌ニ拠ル、唯其有川湾、日ノ島、漁生島、有福島ハ同三十四年荒畑水路監、福江泊地、富江湾ハ同年菅少佐ノ各記事、男女群島ハ同三十九年石井沖島艦長ノ報告ニ取ル、

（中略）

第三編中瀬戸崎港ハ明治二十四年鈴木海軍大尉、七類浦ハ同三十六年坂口海軍技師、隠岐列島ハ同十七年加藤大尉ノ各記事、竹島ハ同三十八年仙頭対馬艦長ノ報告書、高浜湾ハ同三十八年荒畑水路大監、宮津港ハ同三十六年布目少佐、穴水湾ハ同三十九年上野中佐、神通川及岩瀬錨地ハ同二十五年加藤少佐ノ各記事ニ取ル、

（中略）

本書中誤謬ヲ発見スルカ又ハ改補ヲ必要トスル実験ヲ為シタルモノハ速ニ水路部ニ報告アランコトヲ希望ス、

明治四十年六月 水路部長 坂本一

第三編 本洲北西岸 隠岐列島 島後（三百七十一頁）

竹島〔Liancourt rocks〕

北緯三七度九分三〇秒東經一三一度五五分即チ隠岐列島ノ北西約八十哩ニ位セル群嶼ニシテ周回約二哩東西ノ二嶼ト敷岩トヨリ成ル〇該二嶼ハ殆ト不毛ノ禿岩ニシテ四周懸崖ヲ成シ鳥糞ニ蔽ハレテ白色ヲ呈ス其間ニ一條ノ狭水道アリ幅約百二十

嗎、長三百六十嗎水深五尋ヨリ浅ク数個ノ岩嶼暗岩横ハル〇該二嶼ノ周囲ニ碁列セル岩嶼ハ概ネ扁平ニシテ僅ニ水面ニ露出ス

西島ハ高約四一〇呎ニシテ尖峯ヲ成シ東嶼ハ較ヤ低クシテ平頂ナリ〇此群嶼ハ周囲陡界ナルカ如シ然レトモ其位置函館ニ向テ日本海ヲ北上スル船舶ノ航路ニ近キヲ以テ夜間ニ在テハ時トシテ危険ナルコトアリ

此群嶼ハ毎年六、七月頃海豹獵ノ為本邦漁夫ノ渡来スル所ニシテ明治三十八年島根県ノ所管ニ編入セラレタリ

* 日本水路誌第四卷関係海図索引あり。その図に竹島の記載あり。傍線は引用者。

（筑波大学附属図書館）

【引用12】明治44年（1911）12月「日本水路誌 第六卷」朝鮮全岸

序

本書ハ朝鮮全岸ノ水路ニシテ明治四十三年朝鮮ヲ我カ帝国ニ併合セラレシヲ以テ日本水路誌第六卷ト題シ刊行セリ、其主要材料ハ左ノ如シ、

第一編ハ朝鮮沿海一般ノ諸要項ニ関スル総記ニシテ、其中我カ水路部ノ調査ニ係ルモノ、外ハ諸官庁ヨリ得タル材料ニ拠ル、

第二編ハ朝鮮東岸即チ釜山港至豆満江間ノ記事ニシテ、其中広溪末至竹辺湾ハ主ニ明治三十九年海軍技師大林正作、龍湫岬至水源端、鬱陵島及竹島ハ同四十一年海軍少佐並木寅之助、水源端至馬養島ハ海軍水路大技士新井雄吉、馬養島至城津ハ同四十年海軍水路中監値賀寛、城津至漁郎端ハ同四十年海軍大尉大井五郎、漁郎端至豆満江ハ同四十年海軍水路大監荒畑岩次郎ノ実験記事ニ拠ル、

（中略）

以上列記スルモノ、外ハ、千九百四年刊行ノ英版水路誌、明治四十四年発行ノ朝鮮総督府施政年報及統計年報、同年九月迄ノ水路告示其他内外ノ諸材料ニ拠リ改補セシ所尠カラス、

本書中誤謬ヲ発見スルカ又ハ改補ニ必要ナル実験ヲ為シタルモノハ速ニ水路部ニ報告セラレンコトヲ希望ス

明治四十四年十月 水路部長 中尾雄

竹島〔Liancourt rocks〕

一八四九年仏船Liancourt之ヲ発見セシヲ以テ欧

米人ハLiancourt rocksト称ス、其後一八五四年露艦Pallas之ヲMenalai and Olivutsa rocksト名ツケ、一八五五年英艦Hornetハ之ヲHornet islandsト呼ヘリ、而シテ朝鮮人ハ之ヲ独島ト書シ内地漁夫ハアンコ島ト曰フ、

此島ハ日本海上ノ一小群嶼ニシテ隠岐国島前ヨリ大約八十六浬、鬱陵島ヨリ東南東方大約五十浬ニ位シ、幅一鏈余ノ狭水道ヲ隔テ、東西ニ相對スル二島ト其周囲ニ碁布スル幾多ノ小嶼トヨリ成ル、○其西方島ハ海面上高約五一五呎ニシテ棒糖形ヲ成シ、東方島ハ較々低ク其頂上ニ平坦ナル地アリ、又周囲ノ諸小嶼ハ概ネ扁平ノ岩ニシテ僅ニ水面ニ露出シ、其大ナルモノハ優ニ数十畳ヲ敷クニ足ルヘシ、○二島共ニ全部瘠瘦ノ禿岩ニシテ海風ニ曝露シ一株ノ樹木ナク東方島ニ於テ僅ニ野草ヲ生スルノミ、又島岸ハ断崖絶壁ニシテ軟性ノ石層ヨリ成リ、奇觀ノ洞窟多ク殆ト攀躋スヘカラス、而シテ此等ノ洞窟及ヒ小嶼ハ海驢ノ群棲所タリ、此島ノ付近ハ水深ク軍艦對馬ハ東方島ノ南端ヨリ北西方約九鏈ノ處ニ於テ五十八尋ヲ測得セリト云フ、然レトモ此島ハ其位置日本海ヲ航上スル船舶ノ航路ニ近キヲ以テ夜間ハ危険ナリトス、島上ノ平地

島上平地ニ乏シク二島間ノ水道ノ兩側ニ狭小ナル平坦ノ礫地ニ、三箇所アルモ皆海濤ノ侵襲ヲ免レス、○東方島ハ其頂ニ平坦ナル地アレトモ、之ニ登ルノ経路ナク、唯島ノ南端ニ於テ北西風ヲ遮蔽スル三坪若クハ四坪ノ小地アルノミ、○西方島ハ其東西ニ山崩アリテ其上半部殆ト直立スレトモ下半部ハ傾斜稍々緩ナルヲ以テ其半ハマテ達スルヲ得ヘク、其辺ノ堅岩ヲ開鑿セハ東風ノ外諸風ヲ遮蔽スヘキ平地ヲ得ルナランカ、○島上ニハ前記ノ如ク家屋ヲ建築スヘキ地極メテ乏シク明治三十七年十一月軍艦對馬ノ此島ヲ実査セシ際ハ東島ニ漁夫用ノ菰葺小屋アリシモ風浪ノ為メ甚タシク破壊シアリト云フ

毎年夏季ニ至レハ海驢ノ為メ鬱陵島ヨリ渡来スル者数十名ノ多キニ及フコトアリ、彼等ハ島上ニ小屋ヲ構ヘ毎回約十日間仮居スト云フ、淡水

西方島ノ南西隅ニ一洞窟アリ、其天蓋ヲ成セル岩石ヨリ滴出スル水ハ其量稍々多シト雖雨水ノ滴下ニ等シキヲ以テ汲取ニ困難ナリ、○其他山頂ヨリ山腹ニ沿ウテ数箇所ニ滴瀝スル水及ヒ湧泉アレト

モ、其経路ハ海驢ノ糞尿ニ屢々汚染セラレテ一種ノ惡臭ヲ放チ到底飲料ニ適セス、○海驢ノ為メ渡来スル漁夫ハ島中ノ水ヲ汲取シテ煮炊ノ用ニ供スレトモ茶水ハ他ヨリ持来レルモノヲ用フト云フ位置

竹島ノ東方島ノ南端ハ明治四十一年ノ測定ニ拠レハ北緯三七度一四分一八秒、東經一三一度五二分二二秒ニ在リ

*二重傍線は原文のまま。下線は引用者。

(北海道大学附属図書館)

【引用13】昭和8年(1933)1月「朝鮮沿岸水路誌第1巻」総記、航路記、朝鮮東岸及南岸

鬱陵島及竹島

鬱陵島〔松島〕(海図306分図)

(中略)

竹島(タケシマ) 此ノ島ハ日本海上ノ1小群嶼ニシテ島根県隠岐島前ヨリ大約86浬、鬱陵島ヨリ東南東方約50浬ニ位シ幅1鏈余ノ狭水道ヲ隔テテ東西ニ相對スル2島ト其周囲ニ碁布スル幾多ノ小嶼トヨリ成ル(第89頁對面對景図第25及26参照)。其西方島ハ海面上高サ約157米ニシテ棒糖形ヲ成シ東方島ハ較低ク其ノ頂上ニ平坦ナル地アリ又周囲ノ諸小嶼ハ概ネ扁平ノ岩ニシテ僅ニ水面ニ露出シ其ノ大ナルモノハ優ニ数十畳ヲ敷クニ足ルベシ。2島共ニ全部瘠瘦ノ禿岩ニシテ海風ニ暴露シ1株ノ樹木ナク東方島ニ於テ僅ニ野草ヲ生ズルノミ、又島岸ハ断崖絶壁ニシテ軟質ノ石層ヨリ成リ奇觀ノ洞窟多ク殆ト攀躋スベカラス而イテ此等ノ洞窟及小嶼ハ海驢ノ群棲所タリ。

此ノ島ノ附近ハ水深ク軍艦對馬ハ東方島ノ南端ヨリ北西方約9鏈ノ處ニ於テ106米ノ推進ヲ測得セリト謂フ、然レドモ此ノ島ハ其ノ位置日本海ヲ航上スル船舶ノ航路ニ近キヲ以テ夜間ハ危険ナリトス。

島上ノ平地 島上平地ニ乏シク2島間ノ兩側ニ狹隘ナル平坦ノ礫地ニ、三箇所アルモ皆海濤ノ侵襲ヲ免レズ○東方島ハ其頂ニ平坦ナル地アレトモ之ニ登ルノ経路ナク唯島ノ南端ニ於テ北西風ヲ遮蔽スル10乃至13平方米ノ平地アルノミ○西方島ハ其ノ東西ニ山崖アリテ其ノ上半部殆ト直立スレトモ下半部ハ傾斜稍々緩ナルヲ以テ其ノ半迄到達スルヲ得ベク其附近ノ堅岩ヲ開鑿セバ東風ノ外諸風ヲ遮蔽スベキ平地ヲ得ルナランカ○島上ニハ前記ノ如

ク家屋ヲ建築スベキ地極メテ乏シク明治37年11月軍艦対馬ノ此ノ島ヲ実査セシ際ハ東方島ニ漁夫用ノ菰葺小屋アリシモ風浪ノ為甚シク破壊シアリシト謂フ。

毎年夏季ニ至ラバ海驢猟ノ為鬱陵島ヨリ渡来スルモノ数十名ノ多キニ及ブコトアリ彼等ハ島上ニ小屋ヲ構ヘ毎回約10日間仮居スト謂フ。

淡水 西方島ノ南西隅ニ1洞窟アリ其ノ天蓋ヲ成セル岩石ヨリ滴出スル水ハ其ノ量稍多ケレドモ雨水ノ滴下ニ等シキヲ以テ汲取ニ困難ナリ◎其ノ他山頂ヨリ山腹ニ沿ヒテ数箇所ニ滴瀝スル水及湧泉アレドモ其経路ハ海驢ノ糞尿ニ屢汚染セラレテ一種ノ悪臭ヲ放チ到底飲料ニ適セズ◎海驢猟ノ為渡来スル漁夫ハ島中ノ水ヲ汲取シテ煮炊ノ用ニ供スレドモ茶水ハ他ヨリ持来スルモノヲ用フト謂フ。

位置 竹島ノ東方島ノ南端ハ明治41年ノ測定ニ拠レバ北緯37度14分18秒、東経131度52分33秒ニ在リ。

(韓国併合史研究資料50『復刻版 朝鮮沿岸水路誌』、龍溪書舎、2005年)

【引用14】昭和15年(1940)3月「本洲沿岸水路誌 第2巻」本洲北西岸、本洲北岸、隠岐列島及竹島

(中略)

竹島ハ隠岐列島ノ北西方約85浬ニ位ス。

(中略)

竹島(海図162)

隠岐列島ノ北西方約85浬、鬱陵島ノ東南東方約48浬ニ位スル常住者ナキ嶼群ニシテ明治38年島根県ノ管下ニ編入セラレタリ、此ノ嶼群ニハ毎年6-7月頃海豹猟ノ為漁夫渡来スルヲ例トス◎竹島ハ其ノ位置対馬海峡方面ヨリ北海道又ハVladivostokニ向フ船舶ノ航路ニ近キヲ以テ夜間ハ時ニ注意ヲ要スルコトアリ。此ノ嶼群ハ東西ノ2嶼及数岩ヨリ成リ、嶼群ノ周囲ハ急深ナルガ如シ◎該2嶼ハ殆ド草木ヲ生ゼザル禿岩ニシテ尖形峯ヲ成シ、東嶼ハ稍低クシテ平頂ナリ◎此等2嶼ノ周囲ニ碁列スル岩嶼ハ概ネ扁平ニシテ僅ニ水面ニ露出ス。上記2嶼ノ間ニハ1條ノ狭水道アリ、幅約110-160米、長サ330米ニシテ水深9.1米ヨリ浅ク数個ノ露岩及暗岩横タハル。

(韓国国立中央図書館)

【引用5-14】の「日本水路誌」「朝鮮水路誌」に

おける竹島関連記述にかかわって、いくつか気づいた点を述べておこう。

まずは、【引用5】明治25年(1892)の「日本水路誌 第一巻」と【引用9】明治37年(1904)第一改版「日本水路誌 第一巻」の対比であり、より具体的には、それぞれに挿入された色刷りの「海岸区域図」における彩色の対比である。【引用5】では「海岸区域」ごとに色分けされた彩色が施されるのに対し、朝鮮、松島(鬱陵島)、リヤンコルド岩および中国大陆には彩色が施されず、台湾は図中に含まれない(挿図1)。【引用9】でも、同様に朝鮮半島、鬱陵島、Liancourt Rksおよび中国大陆には彩色が施されないが、台湾には彩色が施されるという違いが現れる(挿図2)。二つの「水路誌」が作成された1892年と1904年のあいだには日清戦争勝利による台湾領有という史実がある。これら二つの「水路誌」に挿入された「海岸区域図」における日本列島各地、朝鮮半島、鬱陵島、Liancourt Rksそれぞれの彩色のありさまは、台湾に対する彩色の有無と対比して考えたときに、たいへん示唆的である。日本の領土には彩色を施すが、そうでないものには施さないという姿勢が一貫しているからである。

次に、【引用6】明治27年(1894)「朝鮮水路誌」、【引用8】明治32年(1899)「朝鮮水路誌 第二版」における竹島の説明は、1849年フランス船リアンコルト号による島の発見と命名、1854年ロシア艦、1855年イギリス艦それぞれによる発見と命名に由来すること、函館へ向けて日本海を航行する上で危険な箇所にあたることを指摘することなどの点で共通する。そして、【引用10】明治40年(1907)「朝鮮水路誌 第二改版」は、そうした由來說明と航行の危険性を引き続き述べた上で、「韓人ハ之ヲ独島ト書シ本邦漁夫ハリアンコ島ト曰フ」ことや「トド」猟のために鬱陵島から渡来する者が多数あるとの指摘を付け加える。「韓人ハ之ヲ独島ト書シ…」はよく知られているように1903年における軍艦新高によってもたらされた情報であり、【引用10】には軍艦対馬によって得られた内容も盛り込まれていることが明記される。

一方で、【引用10】と同年ながら三ヶ月遅れで刊行された【引用11】明治40年(1907)「日本水路誌 第四巻」は、竹島に関する記事が明治38年対馬艦の報告書に依拠すると明記されており、函

插图 1

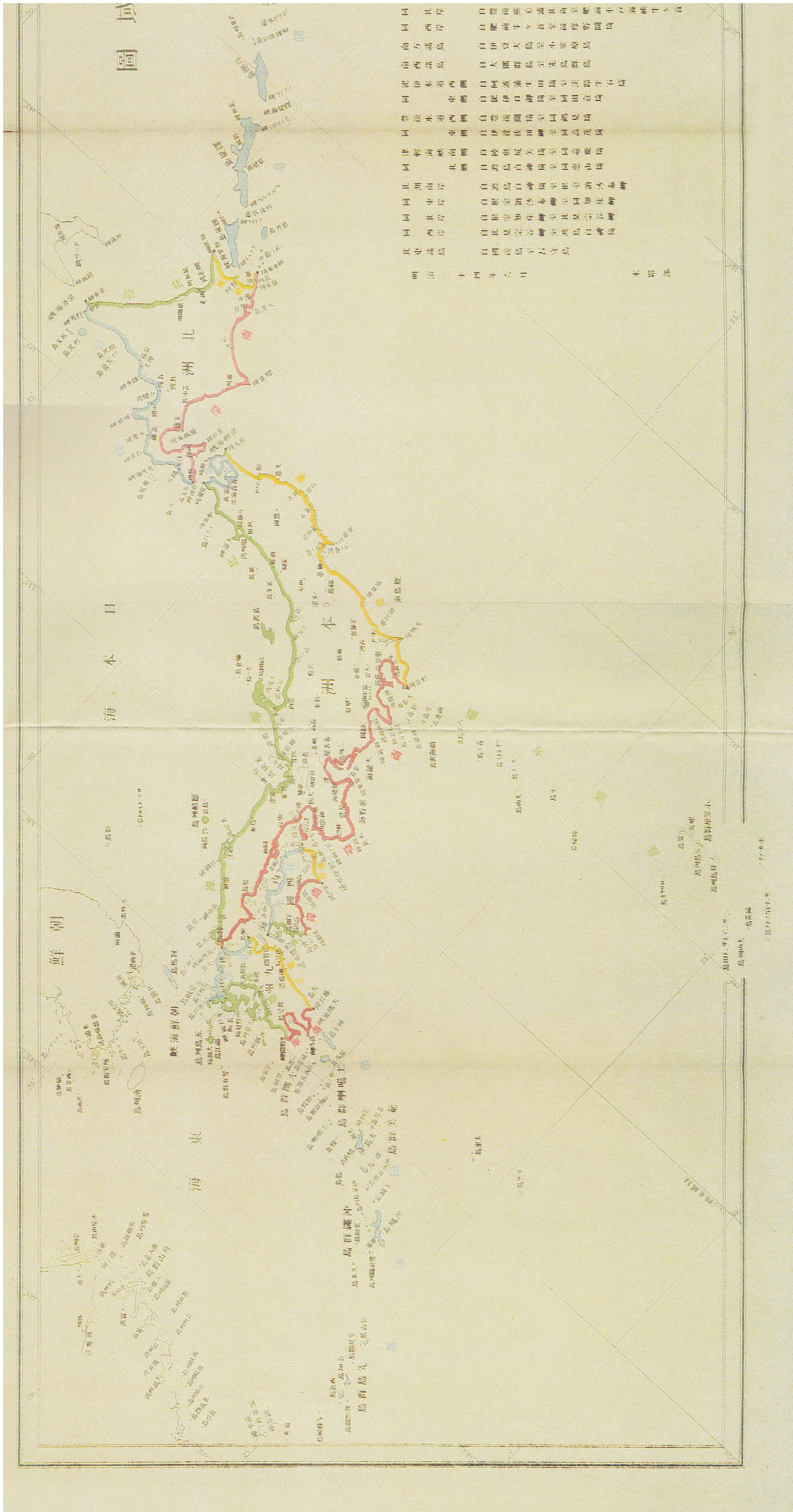
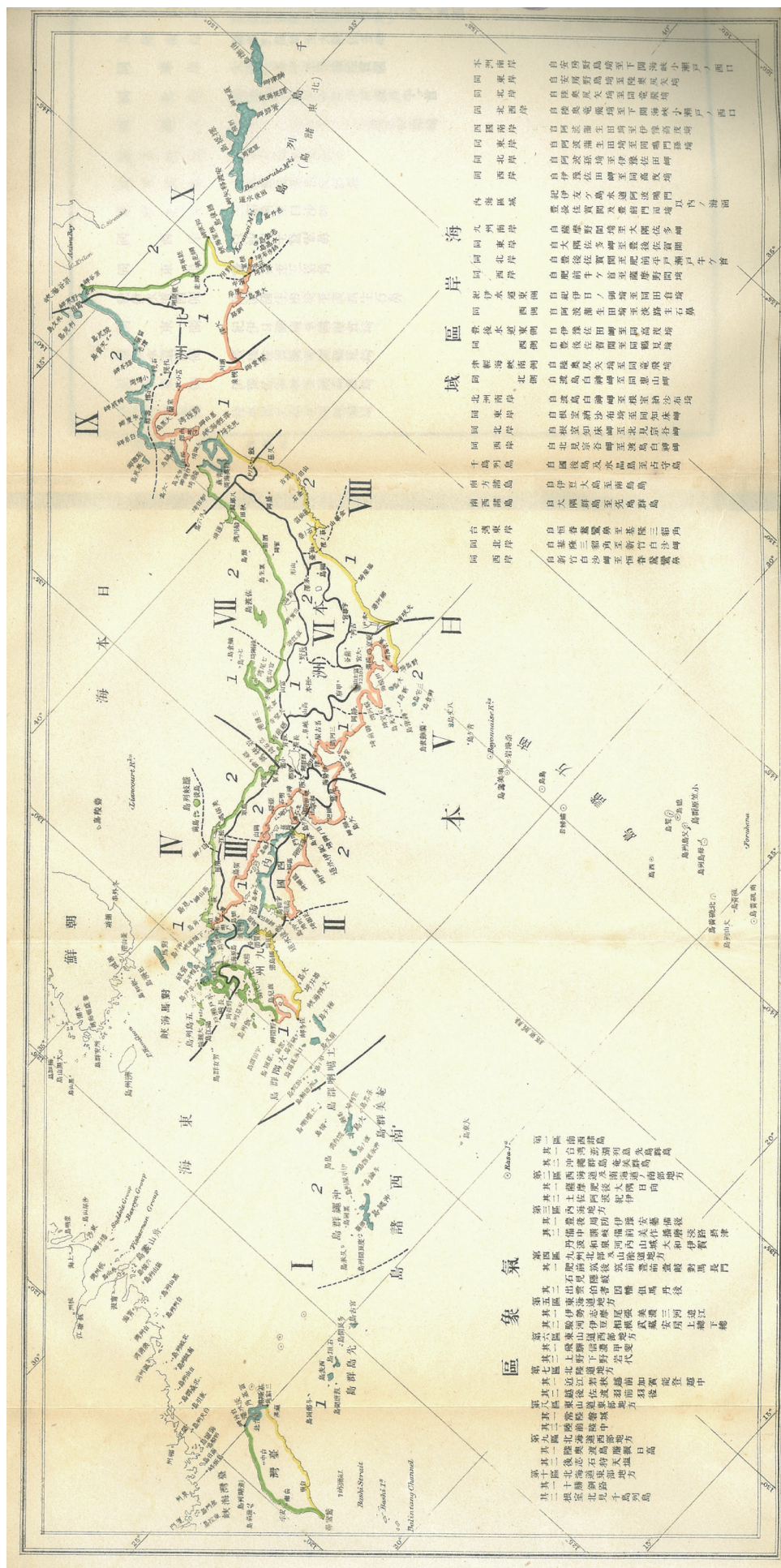


插图 2



館へ向けて日本海を航行する上で危険な箇所にあたることや海豹猟のために本邦漁夫が渡来することの指摘はあるものの、フランス船・ロシア艦・イギリス艦による発見・命名といった島の由来や「韓人ハ之ヲ独島ト書シ…」については一切触れない。また、海豹猟のために渡来する漁夫たちは「本邦漁夫」と記されるばかりで「鬱陵島から」渡来することには触れない。そして【引用11】「日本水路誌」の特徴は、「竹島を（島根県に）編入した」ことを強調する点に伺える。同じ竹島についての記述でありながら、「朝鮮水路誌」と「日本水路誌」とでは少しばかり差異があるということである。その差異は、【引用10】「朝鮮水路誌」・【引用11】「日本水路誌」いずれも竹島日本領編入後の刊行でありながら、前者の記述が日本領編入以前からの情報を継続するのに対し、後者のそれが編入前からの情報を継続せざるを得ないにもかかわらず編入後の姿を強調するものといえる。

そして、韓国併合後の明治44年（1911）に刊行された「日本水路誌 第六巻」朝鮮全岸【引用12】は、以前の「朝鮮水路誌」が「日本水路誌」のなかに繰り込まれたものだが、その記述様式は以前の「朝鮮水路誌」【引用6・8・10】に倣ったものであり、「日本水路誌」【引用11】とは異なっている。

そして、そうした差異は、【引用13】昭和8年（1933）「朝鮮沿岸水路誌 第1巻」と【引用14】昭和15年（1940）「本洲沿岸水路誌 第2巻」とのあいだの差異にも引き継がれているから、同じ竹島の記述でありながら朝鮮半島に引きつけて記述する場合と隠岐諸島に引きつけて記述する場合とで、記述の仕方に異なったこだわりがあるように見受けられる。それは記述の差異にしたがえば、竹島がそもそもどのような島であったかということへのこだわりであるように感じられる。

ところで、明治31年（1898）3月に刊行された『日本水路誌 第五巻 北洲全部及北東諸島（千島）』に付された序文を次に掲げておきたい。

【引用15】

日本水路誌巻五序

本巻ハ寰瀛水路誌第一巻第八編ノ修正版ニ係ル而シテ其編纂起原ノ大要左ノ如シ

（中略）

本邦領海ニ関スル水路誌ハ本巻ヲ以テ結了セルヲ以テ寰瀛水路誌第一巻上下ハ此書發行ノ日ヲ以テ之ヲ全廃ス

本書中誤謬ヲ発見スルカ又ハ改補ニ必要ノ実験ヲ為シタル者ハ時ヲ移サス水路部ニ報告アランコトヲ希望ス

明治三十一年三月 水路部長肝付兼行

*下線は引用者。

（北海道大学附属図書館）

上記引用にも明らかなように、水路部長肝付兼行は、水路誌が「本邦領海ニ関スル」書物であることを明確に述べている。水路誌の作成目的が領土・領海の確定にあるわけではないにしても、その作成にあたって領土・領海が前提されていたことは確かなことだと思われる。そして「海図」と「水路誌」は相互補完関係にあった。堀は水路誌が海図の解説書であると述べるが、それだけでなく、水路誌を読む際には海図を参照するよう指示されている。それは水路誌序文を眺めれば、そうした記述に再々行き当たるところである。

以上からすれば、「海図」「水路誌」は領土・領海を示すことを目的とするものではないが、領土・領海意識を反映した図であると述べて良い。「海図」「水路誌」からは領土・領海意識を読み取りうるのである¹¹⁾。

おわりに

これまでに分析対象としてきた近代日本の「海図」「水路誌」からうかがい知れるのは、1880年代から1905年の竹島日本領編入前までの期間において、少なくとも日本海軍水路部では鬱陵島とリアンコールト列岩を日本領とは見なしていなかった、ということである。朝鮮領と見なしていた可能性は皆無ではないが、「日本領と見なしていなかった」ことが直ちに「朝鮮領と見なしていた」ことにはならないから、判断は微妙なところである。

また、近代日本の「海図」「水路誌」に示されているのは、日本海軍水路部の側の認識であって、朝鮮側の認識ではない。そこに鬱陵島・リアンコールト列岩が記載される／されないことをもって、当該期朝鮮側のそれら島嶼に対する認知の度合いを測ることは不可能である。ましてや朝鮮

(1897年以後は大韓帝国)の領有を示すものではない。「水路誌」の記述を介して「無主地先占」論を批判しようとする宋彙榮の意図は、その意味では全く成り立たない。

一方、1933年発行の「朝鮮沿岸水路誌」と「日本本州沿岸水路誌」のいずれにも竹島が記載されていることをもって、「水路誌」の記載は領土・領海とは無関係であり航行上の安全を図る目的にのみ存する、と強調するのは不当である。1933年にあっては朝鮮半島も日本領の一部であり、日本領海を航行する船舶の安全を図るために、竹島が「朝鮮沿岸水路誌」と「日本本州沿岸水路誌」のいずれにも記載されるのは当然のことだからである。そうした特殊事例をもとに「水路誌」の性格を一元化して理解しようとするのは意図的な誤謬である。「水路誌」「海図」の成り立ちを歴史的に追究してゆけば、その作成にあたって領土・領海が意識されていることは明瞭であり、「朝鮮沿岸水路誌」「日本本州沿岸水路誌」それぞれにおける竹島の記載には島の由来や性質についての差異が孕まれている。そして、その差異は、1905年1月の竹島日本領編入以前においては、リアンコールト列岩は日本領とは見なされていなかった事実由来する。

繰り返しになるが、竹島日本領編入がなされる以前、リアンコールト列岩は日本領とは見なされていなかった。だからこそ、1905年1月における竹島日本領編入の閣議決定文が「無主地先占」を論拠とせざるを得なかったのである。

注

- 1) この第一回韓国政府見解にいう「朝鮮沿海水域調査第三卷「朝鮮海岸」」は、後述する第二回日本政府見解および第二回韓国政府見解において『朝鮮沿岸水路誌』として議論が展開しているので、本稿でもそのようなものとして取り扱う。
- 2) 以下、日本・韓国両政府の見解往復のうち関連部分を抜粋して示す。

【韓国側見解1（1953年9月9日）】(七)昭和二十七年四月二十八日発効した対日講和条約が第一章第二項に関して、日本政府は「竹島は韓国が日本に併合される以前に島根県の管轄下におかれ、併合後も引き続きそうであって、朝鮮総督の管轄下

におかれてはいなかったものである」といっている。

この件については、韓国政府は、竹島が前述第五項に詳細説明した如く合法的に島根県の管轄下におかれたものと認定し難い。兎に角この問題に関して、韓国政府が日本政府に了解を望む事は、日本が韓国を強制的に併合していた間ですら、独島が鬱陵島の附属島と見なされており、鬱陵島の漁師によって管理されていた事実である。

一九三三年日本海軍省の編纂になる朝鮮沿海水域調査第三卷「朝鮮海岸」も亦前述の事実が真実である事を証明している。

【日本側見解2（1954年2月10日）】(3)韓国側は、竹島が朝鮮によって所有され、有効的に経営されていた証拠であるとして、(中略)(d)『朝鮮沿岸水路誌』では、竹島を鬱陵島の附属島と見なしている。(中略)等のことを挙げている。しかし右はいずれも文献や事実の引用が不正確であって、韓国側主張の根拠となるものではない。(中略)(d)については、本来、水路誌は使用者の便宜のために編さんされているものであり、島の帰属とは関係はない。たまたま、竹島が鬱陵島付近を航行する際に関係ある島なので、それを鬱陵島の項において併記したにすぎない。同時に竹島は隠岐列島付近を航行する場合にも関係があるので、『本州沿岸水路誌』第二卷第二編本州北西岸南西部の項でも、竹島を「隠岐列島及び竹島」として載せておるわけであり、水路部が竹島を鬱陵島の附属島として扱っているものではないことが明らかである。

【韓国側見解2（1954年9月25日）】(2)d日本海軍省により発刊された水路誌について、日本政府は「水路誌は使用者の便宜のために編纂されたものであり、その島の領土管轄を処理するためのものではない」と主張し、「竹島が鬱陵島近傍の航海と関係があるため鬱陵島とともに言及されたものであり、また竹島が隠岐島近傍の航海にも関係があるため日本本州沿岸水路誌二卷第2編「隠岐島と竹島」なる標題のもとで言及されている」と述べ、また水路部当局者が竹島を鬱陵島の属島として取り扱ってこなかったことを述べる。

これについては、試みに1933年発行の朝鮮沿岸水路誌と日本本州沿岸水路誌を比べて、竹島に関する記事の詳細さや軽重について比較してみよう。前者には竹島の位置、地勢、産物その他の事項を詳しく述べているのに比して、後者には竹島

の名前のみが記載されているに過ぎない。(万一竹島がもともと日本に所属するものであったとするならば、日本本州沿岸水路誌に、その位置や地勢、産物等を詳細に記述したであろう) このことは、独島がもともと鬱陵島に属する島であり、また地理的にも鬱陵島に属するのが最も合理的だという証左であり、また上記の事実よりしても日本水路当局が独島を韓国領土として取り扱っていたことは明白なる事実である。

さて、これら見解往復から明らかなように、1954年9月25日の韓国側再反論は(A)には触れず、(B)のみに言及した。しかも、それは、『朝鮮沿岸水路誌』『本州沿岸水路誌』それぞれにおける竹島の記述内容を比較検討し、前者が後者よりも詳細であることを理由に竹島は朝鮮領として認識されていたと主張するものであり、力のある反論ではなかった。

- 3) 川上『竹島の歴史地理学的研究』のなかで「水路誌」に言及するのは以下の部分だけである。

このようにして鬱陵島が「松島」ということになったため(補注)、古来「松島」と呼ばれていた隠岐に近い小島の名称が、必然的に次に問題となってきたが、この頃の世界図や水路誌等の政府刊行物では、単に「リャンコールト岩」、「メネライ瀬・ヲリウツ瀬」、「ホーネット列岩」などと外国語の島名をそのまま載せて、日本名は付しておらず、また当時の隠岐の漁民等は、リアンコールトをなまめて「ランコ島」、「リャンコ島」、「リランコ島」などと俗称していたことは、上述のとおりである。(川上47頁)

(補注) 明治13年(1880)の軍艦天城の調査によって、松島・竹島論争に終止符が打たれたことを指す。

- 4) 論点(B)については機会を改めて言及することとしたいが、文献上の記載だけ乃至は地図上の記載だけをもって「竹島は鬱陵島の付属島嶼である」と論じるのは、あまりに主観的で説得力に欠けると感じていることだけ述べておく。

- 5) 蛇足ながら、この海軍海図式の枠外左側面には「明治三十六年七月十七日水路部ニ於テ刊行ス 水路部長肝付兼行」と記される。

- 6) ①は河村克典[2013]を参照。②は拓殖大学図書館の旧外地関係資料アーカイブで画像が確認できる。③は東北大学・外邦図デジタルアーカイブで画像が確認できる。筆者は、山口県文書館の複製本および韓国国立中央図書館の朝鮮総督府旧蔵原本で確認した。

- 7) ④については、筆者は山口県文書館で複製本により画像を確認した。

- 8) 明治29年(1896)の海図「朝鮮全岸」(本稿にいう⑤)に寄せて、船杉は次のように述べる。

…海図には、国境線は記されず、対馬、壱岐、筑前、肥前、長門、石見など、わが国九州、中国地方の沿岸、島も詳細に描かれている。したがって海図「朝鮮全岸」に収録された範囲が朝鮮領であるという根拠にはならない[船杉力修・154頁]。

「海図「朝鮮全岸」に収録された範囲が朝鮮領である」とする主張は、「隠岐国図」に収録された範囲が隠岐国の領域である」と主張するのと同じくらい愚かしいことである。たとえば『新入国記』(1701年)所収の「隠岐国図」に竹島(鬱陵島)が描かれているから「18世紀に竹島(鬱陵島)は隠岐国の一部として認識されていた」と主張するのは、同じ『新入国記』の「河内国図」に大和国・紀伊国・和泉国・摂津国が記載されているのを「大和国以下四ヶ国は実は河内国の一部と認識されていた」と主張するようなものである。あくまで蛇足だが、筆者は「海図「朝鮮全岸」に収録された範囲が朝鮮領である」などとは考えない。「朝鮮全岸」なる表題をもつ以上は、その海図が、隣接する海域・地域を同じ図中に書き込むのは当たり前のことである。筆者が問題にしたいのは、「朝鮮全岸」と題された海図に「朝鮮の領域が描かれない」ことがありうるか、ということである。単一の海図「朝鮮全岸」から性急な判断を下すのではなく、水路部における海図制作の進行にともなって、「朝鮮の領域」が周辺海域・地域とのかかわりでどのように表現されたか、また表現が変化したか、そこに注目しているのである。

- 9) 海図図式の変遷および明治26年海図図式画像は廣瀬貞雄[1989]による。なお、大正5年(1916)海軍水路部刊行「水路部刊行海軍海図式」では、

地名の表記について「地名ハ日本及支那ノ領土領海ニ限り漢字ト羅馬字ヲ用イ…略其ノ他ノ地は概ネ英字名称ヲ用イルヲ例トス」とされていることを、日本史研究会2014年9月例会開催に先立って今井健三氏から教示を得た。明治36年版で「日清韓三国ノ領土領海ニ限り」とされる部分が、大正5年版では「日本及支那ノ領土領海ニ限り」と変化しており、それはこの両版のあいだに韓国併合があったことに由来する。おそらくは明治26年版に「領土領海」なる文言が無いことと併せ考えると、日清戦争後に領土領海を意識し始めたことが明瞭となる。この点についても、今井氏から教示を得た。

- 10) 宋彙榮が「水路誌」分析を行った先行研究として堀論文を掲げないのは遺憾である。堀が「水路誌」を系統的に分析していたことは先に引用した文章を見ても明白である。堀論文が分析したすべての「水路誌」をいちいち掲げなかったのは、論の目的がそこだけにあったわけではなく、また紙幅の関係もあってのことと思われる。

- 11) 水路誌の解釈にかかわって、船杉は次のように言う。

韓国側や日本の一部研究者は、現在の竹島が『朝鮮水路誌』に記載されることをもって、日本政府が現在の竹島を朝鮮領と認識していたと指摘している（堀一九八七、内藤二〇〇〇など）。もしそうであるなら、ナホトカ沖まで朝鮮領となってしまう〔船杉力修・154頁〕。

「ナホトカ沖まで朝鮮領となってしまう」とは聊か先行研究を愚弄した物言いではないか。果たして、堀は、ある単一の『朝鮮水路誌』に竹島が記載されていることのみをもって議論を立てていただろうか。堀は『水路誌』の体系的な整理を通じて分析を行っていたのではなかったか。船杉には先行研究の丁寧な読み取りが明らかに不足しており、そうした粗雑さは先行研究に対する謙虚さの欠如に大きく起因している。

参考文献

- 河村克典 [2013] 「明治15年（1882）「朝鮮全岸」（海図番号21）の作成経緯」『エリア山口』42
- 木村浩吉 [1896] 『海軍図説』大日本図書
- 宋彙榮 [2012] 「近代日本の水路誌に現れた鬱陵島・独島認識」『大丘史学』106
- 塚本孝 [2011] 「韓国の保護・併合と日韓の領土認識」『東アジア近代史』14
- 廣瀬貞雄 [1989] 「日本の海図図式」『地図』27-3
- 船杉力修 [2007] 「絵図・地図からみる竹島（Ⅱ）」『竹島問題に関する調査研究』最終報告書、島根県竹島問題研究会
- 堀和生 [1987] 「一九〇五年日本の竹島領土編入」『朝鮮史研究会論文集』24

* 付記

本稿は、名古屋大学附属図書館研究開発費による山口県文書館調査（2014年9月2-4日）および科学研究費補助金・基盤（S）「宗教テキスト遺産の探査と総合的研究—人文学アーカイヴス・ネットワークの構築」（研究代表者は阿部泰郎名古屋大学教授）の研究分担金による韓国出張（韓国国立中央図書館、2014年9月10-13日）による研究成果の一部である。また、それら調査を踏まえての粗原稿を、本稿と同一題で日本史研究会9月例会（2014年9月28日、京都市）において口頭報告した。本稿は、当日読み上げた口頭報告原稿を下敷きに書き改めたものである。